

『忠臣水滸伝』における<付会の論理>(下)

著者	石川 秀巳
雑誌名	国際文化研究科論集
巻	9
ページ	229-214
発行年	2001-12-20
URL	http://hdl.handle.net/10097/34507

『忠臣水滸伝』における〈付会の論理〉(下)

六

〈山道での強奪〉の共通項によって〈山崎街道〉が〈智取生辰綱〉に付会され、本蔵と楊志とは〈権力者への礼物輸送〉という共通項で重ね合わせられた。そこに〈付会の論理〉が働いたわけだが、十段目の天河屋の場面で義平の舅として登場する太田了竹をこの場面に登場させたことについても、京伝なりの論理があった。

かつて「斧九太夫殿から扶持^{そり}もら」(第十) っていた人物、自らの保身のために娘お園との離縁を要求し、さらに富家に妾奉公させてでも己の栄耀を願おうとする人物であるから、堺の医師太田了竹を「賊禿隠宝刀了竹」(後篇口絵) として取り出すぶんには問題がない。だが、浄瑠璃の『仮名手本忠臣蔵』によるかぎり、離縁状を受け取るとすぐに義平に蹴り出されて退場するだけの端役に過ぎない。その了竹を、

石川 秀巳

双方とも医師を業としたというだけで、「彼が亡父^{ぼうふ}は大宋^{たいそう}の名医^{めいい}安道全^{あんだうぜん}が術^{じゆつ}を伝^{つた}りて(中略) 高医^{かうい}にてありける」(第四回) と梁山泊好漢の一人、神医安道全に結びつける。また、「烟花^{えんくわ}の地^ちに到^{いた}りてもつはら人を惑^{まど}しおほく錢財^{せんざい}を貪^{むさぼる}」幫間医者^{へいけんいしゃ}と造形したのは「貧乏^{ひんぱう}医者^{いしゃ}」(「古今いろは評林」) 了竹像に合わせた形象であろうが、さらに、「故^{なるがゆゑ}に人皆^{ひとみな}彼^{かれ}に一箇^{ひとつ}の綽名^{あだな}を設^{まうけて}。すなはち烟花和尚^{えんくわわしやう}とぞ叫^{よび}ける」(同前) と、花和尚魯智深と付会するためでもあった。医者^{いしゃ}の風体として剃髪しているのが、僧体の魯智深に重ねる契機となった。神像を壊してしまうよう^{よう}な了竹の酔態が、第四回「趙員外重修文殊院／魯智深大鬧五台山」における魯智深のそれを写したことも麻生の指摘がある。大高洋司が述べる^ととおり、了竹が山賊の仲間^{仲間}に引き込まれる物語は松尾山の盜賊の話^話を典拠とする⁽²⁹⁾。京伝は了竹をここに登場させるために、さまざまの工夫^{工夫}をこらしているのである。いくつもの設定を重ねてまで、了竹を本来の登場場面から切り離し、五段目に対応する礼物略奪の挿話^{挿話}に先

行させたのは、どのような理由に拠るのだろうか。

松尾山において貞九郎はこう言う。

汝をとらへて此所にいたらしめたるは、別の事にあらず。曾て汝が家には。宋朝梁山泊の好漢等が用たる。蒙汗薬の奇方をつたへたと聞。彼奇方は我手にありて益おほき薬なり。殊に汝は幫間を業とし。能人情につうじ。諸国の郷談を曉し。口枝等を会。然も舌剣人を害するの達人と聞およひぬ因て今より後汝をとぐめ。此山寨にやしなひて。機密の用に当とおもふなり。(第五回)

了竹を仲間に入れようとしたのは、ひとつにはたやすく人を騙しおおせ得るような口の巧みさのゆえであつた。

若此了竹かことき郷談物飯粧の達人にあらずんば。いかんぞ聡明伶俐なる本蔵を騙こと能や。(同前)

後に本蔵らを欺き礼物を奪うとき、解毒剤と偽つて蒙汗薬を与える詭計に効を奏しもした。だが、重要なのは無論もうひとつの「宋朝梁山泊の好漢等が用たる。蒙汗薬の奇方をつたへたる」ためであろう。へ智取星辰綱の蒙汗薬の趣向を写すのに、京伝は十段目の了竹をその奇方を所有する人物として登場させたのである。

しかしながら、なぜ了竹と蒙汗薬とが結びつくのか。

生薬屋の主人である西門慶による武大郎毒殺を与市兵衛殺しに翻案する第六回には了竹は登場しないものの、狸兎角兵衛が与一兵衛毒殺に使った「砒霜」を「我酒伴」「太田了竹といふ者」から手に入れたと語っていることに注目しよう。『古今いろは評林』は「仮名手本忠臣

蔵』の登場人物二十六人を演じた役者たちの一覧を載せるが、京伝も原則的にはその限られた役名の範囲で人物を設定しようとしている。その中で薬(毒薬)を扱えそうな人物を求めるならば、医師である了竹をおいて他にない。だからこそへ智取星辰綱に必須の蒙汗薬を手するためには十段目から了竹を呼び出さなければならなかったし、狸兎角兵衛が毒薬を入手する経路として了竹の名が出されるのである。こうしたへ付会の論理を確保せずには、蒙汗薬の趣向を翻案しなかつた、できなかったというところに、『忠臣水滸伝』の方法を見るべきであろう。

さらに、了竹起用の根拠は、医者だから薬種の他に毒薬をも扱えるはずだというだけにとどまらないのではないか。前節に述べたのと同じ理由から、やはり飯説という条件を付さなければならぬのだが、ここでも歌舞伎演出との関連を推測できそうである。『仮名手本忠臣蔵』演出史をさかのぼるならば、了竹はむしろ誤った調剤によって人を死なせる藪医者として演ぜられもする。先にも参照した文久年間の台本によれば、丁稚伊吾との応対や下男の権助との対話などを入れ事としているが、ここでの了竹は踏みつぶした飯粒を薬と偽つて与え、伊吾に「胸を悪くしたゲイく」と言わせたり、権助に届けさせた薬で患者を急死させたりもする。了竹は処方の間違つてへ薬で人を死なせ・苦しめる人物なのである。こうした演出を踏まえるならば、毒薬担当者としての了竹の発想がいつそう容易だったと思われる。了竹について、

其比は平敵の仕内にて左のみ是ぞといふ程にもなき役の所近年は

色／＼と敵に道外を取交りての思ひ入つよし(『古今いろは評林』)と、滑稽化の流れがあったと言うから、文久以前にもこうした増補がなされた可能性はあるのだが、仮説として書き留めておくことにする。

七

(第六回「韓平寓居山崎售肉包／千崎過西岡殺野猪」)

「山崎に住む与一兵衛の娘倅児は塩冶家に仕えていたが、勘平ともども実家に戻った。自分が刀を買ったことから判官の死を招いたと悔いる勘平は、師直を討ち主君にわびようと、鎌倉に下った。与一兵衛の後妻夜叉老婆は狸兎角兵衛と密通しており、倅児・与一兵衛にむごくあつた。」

勘平から資金を整えよとの手紙が届き、倅児は一文字楼に身を売る。手紙は角兵衛と夜叉老婆の企みであつた。夜叉老婆は与一兵衛を毒殺する。鎌倉から京都に向かう勘平は、乾魚売りの少年伊吾に真相を告げられる。与一兵衛の墓前で夜叉老婆に白状させるところに、叢から野猪が飛び出し、駆け去った。ついで鉄砲の音がして、老婆の背に当たる。探り出てきた角兵衛を勘平は討った。老婆の懐にあつた五十兩を推し戴き、二人の首を墓前に供える。

千崎弥五郎は、駆けてきた野猪を殴り殺す。もう一匹の野猪に驚くが、それは蓑を着た勘平であつた。

前半の、与一兵衛を謀殺した夜叉老婆・狸兎角兵衛に対する勘平の仇討ちは、『水滸伝』第二十五回「王婆計唆西門慶／淫婦藥鳩武大郎」、第二十六回「偷骨殖何九叔送喪／供人頭武二郎設祭」の武松が兄武大郎を毒殺した潘金蓮・西門慶を殺す話により、また、後半の千崎弥五郎が野猪を殺す話は、『水滸伝』第二十三回「横海郡柴進留賓／景陽岡武松打虎」の武松が景陽岡において虎を殺す話による。京伝は武松故事中の挿話を前後を入れ替えて、『仮名手本忠臣蔵』六段目「財布の連判」、俗称〈与市兵衛住家〉の場面に重ねている(武松の物語の中で鴛鴦楼のくだりだけは取り上げなかった)。

五段目の金品強奪の話が〈智取生辰綱〉の趣向を取り込む形で、本蔵・貞九郎間の事件として第五回に語られたため、勘平に関わる〈鉄砲渡し〉〈二つ玉〉〈猪〉などの要素は第六回に移行している。ここでは、千崎の野猪殺しのほうを先に検討しよう。

景陽岡越えの際に人食い虎を殴り殺す行者武松に対応する人物として、京伝は『仮名手本忠臣蔵』世界から千崎弥五郎を選び出した。たしかに五、六段目の山崎を舞台とする場面に登場はするけれども、虎殺しの武松に付会されるような要素が弥五郎にあるとは思われない。千崎よりは、獵師となつており現に猪を撃とうとした勘平こそがふさわしいように思われる。また、前述のように前半では勘平が西門慶殺しの武松の役を受け持つことから、ここでも野猪殺しを受け持たせてもよかつただろう。なるほど勘平の放った二つ玉は猪ははずれ定九郎を撃ち抜いたのだから、勘平ではかえって離れるという配慮があつた

のかもしれない。が、それ以上に弥五郎にはそうした要素が一切ないのである。にもかかわらず、京伝は、武松の役割を千崎弥五郎に振り、野猪を殺殺させている。それはいかなる論理に拠るのか。

野猪を倒した直後、尾花の中から「亦一隻の大野猪をあらはし出す」ときの弥五郎に着目しよう。

氣力をつかひ四肢ともに軟疲。能再野猪に敵しがたし。若性命を傷ば。いづれの命をもつてか故主の冤をむくゆべき。唯宜避去べしと。闘心を休暗に窺みるに。……

弥五郎はまた野猪が現れたかと冷や汗をかくのだが、蓑を着た獵師を見間違えたのだと分かって安堵する。ここは、『水滸伝』における、虎を殺した後の武松の前に「又兩匹の大虎トビイデ」て、

武松コレヲ見テ大ヒニ驚駭コト限ナケレトモ暗ニヲサメ。我カ命終ニ爰ニ罷ルヘシトテ。

これまでかと覚悟したところ、虎の皮を着た「獵戸人」であったという場面を写している。いったいこの場面の武松は虎を殴り殺すという点でその武勇が顕彰されるのだが、その前後でしばしば恐怖を漏らす人物でもあった。京伝は引かなかったが、虎が出没するからと引き留める酒店主の忠告を酒の勢いで振り切り、夜間に景陽岡を越えることになったものの、官府の印のある立て札にも虎出没の注意があるのを見ると、たちまち怖じ気づき麓に引き返そうとするのであり、自らを励ますようにして夜の山道を登るのである。つまり、武松をへ危険な山道を夜中に越える男へ、あるいはへ夜中の山越に狩人と出会う男へと

捉えることができるのであり、そうするとき、『仮名手本忠臣蔵』の千崎弥五郎の設定に重なるだろう。へ鉄砲渡しへでの弥五郎の様子は次のようだった。

旅人もちやくと身構へし。ム、この街道は無用心と知つて合点の一人旅。見れば飛び道具の一口商ひ。得こそはかさじ出直せと。びくと動かば一討とまなこをくばれば。……

盗賊出没の危険性を承知の上で注意を怠らず山道を越えてきたのであり、火を貸してくれと言う獵師が勘平であると知って安心することでは、まったく武松に類似している。この場面の中核である虎殺し自体に比するならば周辺のでしかない要素に共通性を発見してみせ、類似を言い立てるのが、京伝の発想法であった。

同じように、前半部はへ与市兵衛住家へに武松―潘金蓮―西門慶の物語が付会されるのだが、これにしても類似しているとは思われない。歌舞伎の書き換え作で意図的に善悪を逆転させて登場させることは珍しくないし、与市兵衛が武太郎と重なるのは、一方が老齡故のひ弱さ、他方が生来の虚弱を類似点と見るとき領けるとして、与市兵衛女房―潘金蓮という対応は意外にすぎるだろう。狸の角兵衛と西門慶とを付会するには何らの類似をも見出しがたい。武太郎は妻金蓮とその密通相手である西門慶のために毒殺され、与市兵衛も定九郎に斬殺されるのだから、二人とも非業の死をとげるというのは同じだとしても、周辺の人物に「所類」を見出すのは困難である。にもかかわらず、干魚売りの少年鄺哥の役を担当させるために十段目から天川屋の丁稚伊吾

を移動させてまでもこの場面を付会している。そうした付会が可能である京伝が考えたのも、ごく些細な類似性の発見に基づくのではないか。

与市兵衛殺しの疑いをかけられ追究された勘平は、縞の財布の証拠から義父を撃ち殺したのが自分だったと思いこみ、せっぱ詰まって刀を腹に突き立てる。そのあとで誤解であったことが明らかになるわけだが、郷右衛門は、こう言つて勘平を義士の連判に加える。

思はずもしょうとの敵うつたるは。いまだぶうんにつきざる所。

『仮名手本忠臣蔵』自体が仇討ちの物語ではあるが、その内部でさらにもう一つの仇討ちを成し遂げるのが勘平であった。勘平は義父のへ仇を討つという点で、兄のへ仇を討つ武松との類似を主張しうるのである。京伝は、それだけを支えに『仮名手本忠臣蔵』とはまるで似ていない物語をこの段に付会したのである。〈付会の論理〉こじつけの論理であることをここでも確認できる。

八

(第七回「奪密書標児死節／放擲釵児大星示号」)

驚坂伴内は、九太夫とともに一李達屋に遊ぶ大星の様子を探った。大星は仇討ちのため恥を忍びつつ廓に戯れている自分の境遇に涙し、天井に絶句を書き付けて奥に入った。伴内は大星に仇討ちの意志なしと判断し、鎌倉に告げるため廓を去る。九太

夫は、大星の書いた絶句に復仇の意志が現われているので、証拠として切り取る。大星が貌好からの密書を読む。二階にあった標児は大星の懐から密書を奪い取り、それを証拠として師直方に訴えると言う。取り戻そうと争ううち大星に刺された標児は、夫の贖罪のために刺されようと挑発したことを明かし、自分の死に免じて勘平を仲間に加えてほしいと訴える。連判状に勘平の姓名を書き付け標児に代理の血判を押させると、標児は喜んで死んでいく。床下から九太夫を引き出した大星は、標児に一つの功をあげさせんと、標児になり代わり九太夫を打ち止めた。

標児が勘平に変わつて死ぬなどの点は異なるが、第七回は『仮名手本忠臣蔵』七段目「大臣の鎗刀」にきわめて近い形で書かれている。その中で京伝は、大星に宋江の挿話を重ねようとする。つまり、『水滸伝』第三十九回「潯陽樓宋江吟反詩／梁山泊戴宗伝仮信」の宋江が潯陽樓で酔つて叛詩を書く箇所を写して一李達屋の大星に詩を書かせることであり、第二十一回「虔婆醉打唐牛児／宋江怒殺閻婆惜」の閻婆惜殺しを写して大星に標児を殺害させることである。

まず、〈酒樓における煩悶〉を共通項として取り出すことができる。たしかに、遊蕩を続ける大星の真意——仇討ちの意志すなわち叛意を探るために九太夫・伴内が茶屋一力に登場するし、真意を隠しての遊蕩とその苦慮こそが『仮名手本忠臣蔵』の主旨でもあるのだから、その点で潯陽樓で酒を酌み嘆息する宋江の場合に通ずる。大星が叛詩を

書くことの「叛」の要素についてはそれで説明しうる。さらに、七段目を潯陽樓に付会する根拠は、関連作を介して見出された。大星が祇園の茶屋の天井に詩句を書いたという話の典拠は、実説（伝説）にも、『仮名手本忠臣蔵』の周辺にも存した。たとえば『日本花赤城塩竈』（安永十年（一七八二）初演）等に、実説に基づく天井の詩歌の趣向が取られている²⁹。京伝はこうしたもののいずれかに基づいて天井に詩を書かせることにしたのである。

閨婆惜の件はどうか。閨婆惜殺しの原因は「手紙」にあった。生辰綱略奪が知れて捕縛の役人が向かうとき、宋江は密かに知らせて晁蓋たちを逃がしてやった。無事梁山泊に逃れることのできた晁蓋から贈られた銀と札状とを閨婆惜の部屋に忘れ、取り返そうとして争ううちに殺してしまうのである。そのやりとりは直訳に近い形で大星「僊児の間に取り交わされる。『仮名手本忠臣蔵』七段目を支える重要なモチーフがかほよから届けられた「手紙」であつたのは周知のとおりである。おかるは延べ鏡によって密書の中身を読んじまう。平右衛門が看破したように、大星は密書の秘密を守るために身請けと偽ってお軽を郭の外に連れだし、口をふさごうとしたのだが、これを「手紙を盗み見た女の殺害」とまとめるならば、両者は重なりあう。閨婆惜が宋江の妾であることと、大星が「三日なりとも囲うたらそれからは勝手次第」の約束でおかるを「身請けしよう」とするのとが類似していると主張したり、おかるに「問夫がある」のを承知の身請け話であることと、閨婆惜に張三郎という愛人がいたことをも類似点に数えたりするのは

こじつけがすぎるとしても、「手紙を盗み見た女の殺害」という「所類」の発見がこの部分の付会の根拠となつたのは確かであろう。

「手紙」が重視されたことの証拠として前編に掲げられた大星の口絵を挙げる事ができる。口絵に付された「二代大忠企密謀／眠花宿柳 緩仇讐／先除獅子身中害／更制至剛以至柔」という題詞は、『通俗忠義水滸伝』『呼保義宋江』のそれ「一代大俠……」をまねつつ、第二句が祇園における遊蕩を、第三句が九太夫殺害を、そして第四句が血氣にはやる三人侍を制する所を表している。つまり、七段目の大星をその代表的な登場場面と見ていたと見做し得るだろうし、何よりも、かほよからの密書を読む大星の姿が選ばれているのである。

九

（第八回「重太郎月夜会武森／戸難瀬雪天闘土兵」）

鎌倉に下った平右衛門は、竹森喜多八の居酒屋で高家の足輕に痺れ薬を盛り、衣装・切手を奪うと、師直の邸宅に入り込み様子を探った。

本蔵失踪後、桃井のために拷問を受けていた戸難瀬・小波母子は、放免されると、本蔵の行方を尋ね京都に向かった。途次、馬士に襲われたが、戸難瀬は柳を引き抜いて退散させた。大津で本蔵の手配書きを見るとき、兼好法師に声をかけられた。兼好の庵に匿われた母子が土兵らに襲われるが、兼好の恩を受け

た命松に救われる。兼好に類の及ぶのを恐れた戸難瀬は小波の許婚者大星の隠れ家をたよって出立つ。

八段目は「道行旅路の嫁入」に基づく。詞章自体がきわめて短いから、撮合も困難だったのだろう、前半の義士の探索活動は『仮名手本忠臣蔵』にない要素を取り込んである。ただし、七段目の平右衛門の台詞に、

師直めを一討ちと鎌倉へ立ち越え。三が月が間非人となつてつけねらひましたれども。…… (第七)

とあつて、平右衛門が鎌倉に下つて師直邸を探索する挿話を語る契機が確保されてはいた。

ここで、「所類」の発見に基づく『仮名手本忠臣蔵』と『水滸伝』との付会を基本的方法としていた『忠臣水滸伝』が、関連作を介してすら付会の経路を見いだせなかった場合に、どのように物語を書き上げるかという問題に触れておこう。そうした場合、『仮名手本忠臣蔵』を書き換えるのに京伝が取ったのは、関連作との間に〈付会の論理〉を適用する方法である。第八回で言えば、平右衛門が鎌倉に下つたおりに見聞した田楽小屋に掲げられた演目を、『太平記』の文辭に基づいて作り出したりするのがその例である。京伝は、『水滸伝』との付会ができない場合でも、『仮名手本忠臣蔵』そのままの物語を書いてすませようとはせず、自己の設定した方法に準じて、「黄表紙的」な改変を加えている。

後半の、戸難瀬母子の鎌倉から京山科までの嫁入りの旅を行方不明の本蔵を探索旅に改めたのは、第五回に合わせたためであろう。その中に書き込まれた馬飼い・土兵との争闘の挿話は、一つは魯智深に基づき、一つは『徒然草』を利用したものである。『徒然草』についてはいずれ考えるところとして、まず、戸難瀬に魯智深の怪力ぶりを演じさせたことを問題としたい。母子を襲う馬飼いたちに柳の木を引き抜いて立ち向かうのは、『水滸伝』第七回「花和尚倒拔垂楊柳／豹子頭誤入白虎堂」の魯智深が柳樹を根こそぎ引き抜いて見せ、菜園荒らしを威服させる話が典拠となっている。しかし、『仮名手本忠臣蔵』の戸難瀬にそのような要素を見出すことはできない。しかも、魯智深の怪力譚を取り込みながら、同時に「かの梁山泊の女将一丈青扈三娘が再生にやあらん」と設定しものである。魯智深の行動を写したのは、「女将」性を描くために魯智深の怪力を借りたからだとも言えそうであるが、それなら扈三娘的な活躍——梁山泊軍との戦闘におけるめざましい活躍、あるいは反乱軍との戦いの中での活躍など——を与えればよかっただろう。つまり、ここでの戸難瀬と扈三娘との付会は物語展開から浮いているのである。では、人物形象・説話のいずれの面においても類似性を持つとは思われないのに、加古川本蔵女房戸難瀬を「二丈青扈三娘が再生」と言い張るのは何故か。前編口絵には両刀を腰に差した旅姿の戸難瀬を載せ、題詞で「佩刀相携二八女」と女ながらも剣を帯びることを強調するのが、京伝の意図の在処を教えてくれるはずである(図1)。『仮名手本忠臣蔵』九段目において、戸難瀬は、



図1 『忠臣水滸伝』前編

この二腰は夫が魂。これを差せばすなはち夫本蔵が名代と。わたしが役の二人前。(第九)

と、夫の名代であることの証として「刀脇差」(第九)の両刀を腰に登場する。京伝はそれに関わらせながら、「原来本蔵は能双刀をつかひ精く剣法に通じたる勇士なれば。……」(第五回)と言い、「丈夫に剣法をまなびて。能両刀をつかふ」(第八回)と説明しながら、戸難瀬に二刀を携えさせもした。他方、扨三娘も「双ノ手二両刀ヲ揮」(『水滸伝』第四十八回)「一丈青単捉王矮虎／宋公明両打祝家莊」う女なのであり、そこにただひとつ共通点が存する。〈両刀を持つ女〉というのみの片々たる類似を探り求めて、両者を同一と主張してみせたわけである。

(第九回「本蔵短笛吹別鶴曲／力弥長鎗得雪仏頌」)

大星は亡父八幡六郎の七回忌のために力弥とともに陰山に赴いた帰路、大雪にあう。辻堂に夜を明かすとき、夢に判官が現われ、危急を告げた。目醒めた大星が力弥とともに脱出し、振り返ると辻堂が燃え上がっていた。翌朝、ようやく家に帰り着いた。

戸難瀬母子は大星の家に至り、祝言を申し入れたが、大星の妻阿石は拒否する。小波の首を打とうとする戸難瀬に対して、阿石は盗人の汚名を晴らすためと本蔵の首を要求する。虚無僧姿の本蔵が現われ、貞九郎の首を差し出す。大星は復讐の意志を明かし、師直にたとえた雪仏を力弥が槍で突き崩すと、中から師直邸の絵図面が現われた。兼好法師が命松に埋めさせたものであった。

『仮名手本忠臣蔵』九段目は八段目の道行を受け、小浪と力弥の婚礼が核となっていた。『忠臣水滸伝』第九回においても、婚約履行を求めろくだりは浄瑠璃と同じである。本蔵の死の部分は「白髪首」を介して定九郎の首を持った本蔵の登場に替えられるが、これは『水滸伝』には関与しない。そこに語られるのは『徒然草』のもじりである。ここに『徒然草』が取り込まれるのは、小池藤五郎ならずとも不審を覚えさせるところだが⁽³¹⁾、〈付会の論理〉について見れば『水滸伝』の場合と同じである。すなわち、第百十五段「ぼろぼろ」は虚無僧という

点で『仮名手本忠臣蔵』と接点を持つのであり、第五十五段「いへのつくりやう」は、物語の展開に関わりを持たないまま、屋敷の絵図面にこじつけられるのである。

九段目の趣意は、戸難瀬母子・本蔵が山科の大星閑居に現れ、わざと力弥に刺された本蔵が自分の罪を詫び、婿引き出として師直邸の絵図面を贈るところにあるのだが、京伝は、趣意とは関わないその冒頭部分に林冲故事の後半部分、第十回「林教頭風雪山神廟／陸虞侯火燒草料場」を付会している。そのために八幡六郎の仏事を言い出させたりもしている。林冲故事を付会したいという意図が先行したのかもしれないが、そうだとしても、まったくの恣意によったのではない。では、これを付会する京伝の論理とはいかなるものだろうか。

林冲故事は回目の「風雪山神廟」が表すように、雪の中での事件を語っている。これを利用した『教訓いろは醉故伝』でも、やはり雪中に設定していた。一方、九段目の冒頭には、現行の演出ではしばしば省略されるのだが、雪玉を転がしながら祇園町から帰宅する大星を登場させる「雪こかし」の場面があった。まさに「雪中の移動」という一点に付会の手がかりを見出したのである。

『仮名手本忠臣蔵』ではそれは雪づくりの五輪の塔に仕立てられて大星の懸命の意志を示すものであったが、京伝はそこに絵図面を忍ばせるように改変した。絵図面がこの段の重要モチーフであったことに見合ってこうした変形を施したのである。

十

判官切腹後、城明け渡しの際に「先君せんくんの御憤りおんいきどほ。晴らさん」意志が確認され、仇討ちの計画が動き出す(四段目)。「心底見とゞけ」られて勘平が「血判けつばん」し(六段目)、平右衛門も「あづまの供を許」される(七段目)。既定の四十七士の結集が成ったあとも、「徒党の人数はそろへとも。敵地の案内知れざる」ことを由良之助は懸念していたが、懸案の師直邸の絵図面も「聲殿へ。お引き」として本蔵から贈られる(九段目)。そうした仇討ち構想の展開の上に配された十段目「発足の櫛笄」は、武器調達をめぐって展開する。しかし『忠臣水滸伝』は、兼好法師の好意による絵図入手こそ語ったものの、四十七士の結集には特段の配慮も見せず、武器調達の主題も消去して、次のような話に転換している。

(第十四「島寺袖義士を眷恋す／天川屋屠児を拳打す」)

塩冶判官の生前、主命によって大和の国に赴いた山背助宗村は、屠者の長に婚姻を強制されたのを厭って自殺を決意したのだという島寺内記・袖の芸人親子を哀れみ、長を殺害して親子を逃がした。この件が判官の耳に入るが、判官は百両の金を与えて宗村を出奔させる。内記と再会した宗村は、袖を妻とし、それぞれ天川屋義平・阿園と名のつて沙界に回船問屋を営ん

だ。

貌好母子は判官の弟縫殿助のもとに匿われていた。天竜寺で小衙内を出家させようとするが、山名は塩冶遺臣に逆謀あるとの疑いにより、母子を鎌倉に連行しようとする。が、貌好は小衙内を刺殺し、自刎していた。天川屋義平が、阿園と義松を身代わりに仕立てたのだった。貌好母子を長持に忍ばせ沙界に運ぼうとする途次、土兵に襲われるが、義平は長持の上に座って大見得を切り、退散させた。

この部分を①〈天河屋義平の前身譚〉と②天竜寺での〈貌好母子救出譚〉とに分けて考えよう。

塩冶の家士であった山背助宗村が町人に身を落とすに至った事情を語るのには、すでに指摘されたとおり、『水滸伝』の魯智深故事が援用された。酒家に酒を酌む宗村が隣室で嘆く鳥寺内記・袖の親子から屠者の長の悪事を聞き助けてやろうとするところは、『水滸伝』第三回「史大郎夜走華陰県／魯提轄拳打鎮關西」で金老人・翠蓮親子の話を聞いた魯提轄が肉屋の主人鎮關西を懲らしめに赴こうとする説話を取ったのだし、屠者の長を懲らしめる実際の行動は、鎮關西撲殺に換えて、第五回「小霸王醉入銷金帳／花和尚大鬧桃花村」の、娘の身代わりとなって寝台に臥し、押し掛け婿の山賊跳澗虎陳達を懲らしめる話を作り替えたものである。

『仮名手本忠臣蔵』で、天河屋義平が大星らのために危険を顧みず武

器調達を引き受けたのは、「塩谷公の御恩を受けた」故だった。京伝はその「御恩」の内実を、魯智深故事の付会によりつつ天川屋義平＝山背助宗村の物語として充填したわけである。

第十回前半部の〈天河屋義平の前身譚〉はたしかに『水滸伝』の挿話を元に作られているのだが、これまで見てきたような『仮名手本忠臣蔵』と『水滸伝』との間に見出された類似に基づいて付会するという方法は見出しがたい。また、第十回後半に語られる、義平が自分の妻子を殺し、判官妻子の身代りにするという趣向について、鈴木敏也は『菅原伝授手習鑑』によると考えているが⁽³²⁾、それは典拠である『太平記忠臣講釈』にはあてはまるけれども、むしろ『義経千本桜』（延享四年〔一七四七〕初演）三段目〈鮎屋〉におけるいがみの権太親子の悲劇の方が近いだろう。いずれにしても、この〈身代わり譚〉にも〈付会の論理〉は見出しがたい。

ただし、「宗村」という名が『太平記』の判官重臣山城守宗村に基づくという事実⁽³³⁾に着目するとき、『仮名手本忠臣蔵』関連作としての『太平記』を媒介とした、『仮名手本忠臣蔵』書き換えの論理が浮上してくるはずである。

まず、〈天河屋義平の前身譚〉を構想する方法を検討してみよう。『太平記』第二十一巻、判官の妻子が丹波路から出雲に逃げるところを山名らが追跡する。八幡六郎らが防戦するときに、山城守宗村は、判官妻を刺殺し、子供は自分が抱きともに刺し貫いて死ぬ。しかも、その小家に火をかけるために、後に焼けこげた男女と子供の三遺体から

追手が判官夫婦とその子のものと誤認するのだから、ここには判官のための身代わり犠牲死の趣向を読み取ることができる。ここで初めて天河屋義平Ⅱ山背助の設定の意味が理解される。この〈死の偽装〉に基づいてかほよ母子の身代わりの趣向が発想されたと思われるからである。

さて、第十回で京伝は義平に『水滸伝』の魯智深故事中の〈拳打鎮関西〉と〈大鬧桃花村〉に基づく行動を取らせたが、『仮名手本忠臣蔵』に付会する根拠は見いだせなかったし、〈身代わり譚〉も『水滸伝』とは関わることもない書き換えに終わっていた。こうして第十回の物語は内容において『水滸伝』と『仮名手本忠臣蔵』との「所」類」に基づく付会がなされなかったが、京伝は、義平Ⅱ九紋龍史進の対応を主張する。

義平は今かく民間に下りけれども。武夫の志をわすれず。當生のひまには此の地の後生等をあつめて。劍訣打拳等を教へ。もつはら義をとふとみ利をいやしめ。かの宋代の豪傑九紋龍史太郎が為人をしたひて。背上に雲龍の花繡を刺けるゆゑに。時の人皆彼が混名を黒雲龍義平と做叫。一個の好漢とた、へて大にうやまひけり。(第十回)

この義平と史進とを重ね合わせるところには、京伝のどのような論理が働いているのか。

この設定は、〈義平前身譚〉とも、家族の〈身代わり譚〉とも関わらないところで持ち出された。ただし、義平に関してはこれのみが『仮

名手本忠臣蔵』と『水滸伝』との間で結びつけ得た——付会のための共通性を持つ部分だったのではなかったか。だからこそ、前編段階で、長持ちの上にどつかとすわり上半身肌脱ぎとなつて龍の彫り物を見せる義平画像が予告的に掲出されたのであろう(図2)。

口絵に対応するのが次の場面である。かほよ母子を忍ばせた長持ちを堺へ運ぶ途中で襲つてきた土兵に向かつて、義平はこう言う。

義平は是火性短気の生れにてあれば。忽一発の怒り心上よりおこり。立かゝりたる土兵を踢退。おのれが身を把りて担子の上におほひ。大に吼て曰。你們清淨の當生をする我輩をとらへて賊なりといひ。担子に手をくださんとすは。却是你們こそ賊ならめ。我をたれとかおもふ。我は是泉州沙界に住て天川屋義平といふ好漢なり。しひて担子に手をくださば立地に踢殺べし。これを見よといひて両祖。白漫々地肥て銀板のごとき背上に刺し。雲龍の花繡をあらはして見せけるに。……(第十回)

この箇所が、十段目、堺の天河屋の店先に現れた役人たちに、長持ちの中には塩冶浪人のための武器が入っていると疑われたときの、長持明んとするところを。飛ひか、つて下部を蹴退け。蓋の上にどつかと坐り。……

という義平のしぐさや、

ハ、ハ、ハ、女わらべを責めるやうに。人質とつての御詮議。天河屋の義平は男でござるぞ。子にほだされ存ぜぬ事を。存じたとはあ申さぬ。



図2 『忠臣水滸伝』前編



図3 『忠臣蔵即席料理』

という啖呵にもとづくことは明らかだろう。『仮名手本忠臣蔵』の天河屋義平は、まず長持ちの上に「どつかとすは」ところに特徴を認める。一方、九紋竜史進は、長持ちの上にこそ座らないけれども、柳樹下に持ち出した涼み台に座る人物であったし（第二回「王教頭私走延安府／九紋竜大鬧史家村」）、その際に諸肌ぬぎとなつて竜の刺青をあらわにするところが図像として類型化していた³⁴。そのような史進像が義平の上に重ねられるためには、さらに、歌舞伎演出における義平があつたはずである。浄瑠璃本文に義平が諸肌ぬぎになつたと書かれてはいるわけではないし、人形の演出がどうであつたかも不明である。歌舞伎においてどのように演ぜられていたかも、台帳が残っていないために確認できない。けれども、たとえば京伝作の黄表紙『忠臣蔵即席料理』（寛政六年（一七九四）刊）には、やはり諸肌ぬぎの襦袢姿で生

け簀の上にどつかと座つて見得を切る義平が描かれており（図3）、当時の演出を窺うことができる。とすれば、両者ともへ腰掛けて諸肌をぬぐ男なのである。ここでも、付会の経路は物語展開上少しも重要性を持たない共通項だったわけである。

十一

そう考えるとき、次のことが問題となつてこよう。京伝は、義平Ⅱ史進の類似を言いながら、説話においては史進の挿話を取り込もうとせず、魯智深の挿話を義平に演じさせていた。それは何故か。一つには、義平の物語に相当する『水滸伝』の説話を見つけることができなかったからであろう。第十回の回目「島寺袖義士を眷恋す／天川

屋屠「児を拳」打す」が「義平前身譚」の内容を端的に表しており、『水滸伝』の「拳打鎮関西」に依拠したものであることを明示している。

しかし、前編に掲出された「忠臣水滸伝総目録」において、第十回の回目は「了竹奪」休園児／由良試「探義平」であった。当初案は、

義平の行動に不審を感じて巻き添えになるのをおそれた舅の了竹がお園の離縁状を要求すること、あるいは町人に武器調達の大事を委ねるのを危ぶむ義士たちの疑いを晴らすために義平を試すことを表し、十段目の内容を要約しただけのものであった。『忠臣水滸伝』の回目は『水滸伝』のそれを模倣したり、『水滸伝』の事物を織り込んだりして作られている。第一回が「天災」、第二回が「白虎庁」、第三回が「大開足柄山」大開野猪林、第四回が「寺岡」神行、第五回が「蒙汗葉」「金銀担」……と『水滸伝』を想起させる語句が取り込まれていたし、第十一回の「大聚義」「降石」は『水滸伝』第七十一回を暗示するはずである。なのに、第九回・第十回は両作の結びつきを明示していない。第九回の「尺八」は『仮名手本忠臣蔵』をしか指さないし、「力弥」も『水滸伝』との関連を主張してはいない。「雪」で林冲故事を示したと言えようが、そして実際にそのように書かれたのだが、もともと『仮名手本忠臣蔵』に「雪仙」の趣向が存在しているから、回目自体はそうした関連を積極的に主張してはいないと見るべきだろう。

とくに、第十回の回目当初案が、『仮名手本忠臣蔵』十段目の内容に見合いはするものの、『水滸伝』との関わりを思わせる要素を何も持たないのは、第十回の構想に変更があったこと、あるいは、前編執筆の

時点において第十回の構想が立っていなかったことを意味してはいないか。前編口絵に示されたように、義平Ⅱ史進の付会は決まっていたはずだが、それ以外について『仮名手本忠臣蔵』と『水滸伝』をいかに付会するか、まだ予定がなかったのではないか。

実際に書かれた第十回では『水滸伝』によって前半を、他の浄瑠璃・歌舞伎によって後半を構成した。回目だけを見れば、当初の構想においては『仮名手本忠臣蔵』的なお園Ⅰ了竹の親子関係や了竹の強欲さがそのまま写されるはずだったように思われる。しかし、当初の構想においても了竹をここに登場させえたかどうか。京の医師で貞九郎の配下となった男と書かれてしまったわけで、これを堺の医師に戻すのは困難だっただろう。また、天河屋の丁稚伊吾は、〈少年〉という点のみを媒介として武松故事の中に登場する鄆哥に重ねて、第六回に配置転換されている。十段目を構成する役者は不足せざるを得ない。にもかかわらず、十段目そのままでのような回目を提示していたことになり。とすれば、十段目的な内容を第十回に用意していたのが現行のよう

に構想を改めたと見るよりは、前編執筆段階の構想において、第十回については具体的な構想が立っていなかったと考えるべきだろう。

ちなみに、天河屋義平は前編口絵に描かれるけれども、鳥寺の袖は後編に初めて載る。義平Ⅱ魯智深をささえる〈拳打鎮関西〉大開桃花村Ⅲに登場する翠蓮および庄屋の娘の役割を『太平記』に基づいて登場させた鳥寺の袖に受け持たせて構成したのだが、そうした構想は、前編段階では立てられておらず、後編の段階で新たに立てられた可能

性がある。

後篇に入って、『仮名手本忠臣蔵』―『水滸伝』間の撮合関係が弱くなっているように思われるのも、この構想のありように関係するのではないだろうか。魯智深故事は梁山泊好漢の銘々伝の中でも人気のある部分であろう。それを戸難瀬や義平に付会するときに、「所」類が根拠となつてはいなかった。関連作のうち『徒然草』の章段を利用するところでも、『水滸伝』との関連は認められない。これらは、後篇構想が前編ほど周到に用意されていなかったことを表しているのではないだろうか。

十二

『忠臣水滸伝』に与えられた「黄表紙的」という評語のよって来る所をめぐって、検討を重ねてきた。京伝は『仮名手本忠臣蔵』と『水滸伝』との間に人の気づかないような類似点、むしろ些末な類似点を見つけたし、それを経路として両者の挿話を撮合したのである。浄瑠璃『仮名手本忠臣蔵』に『水滸伝』との類似点を発見できない場合は、その周辺にある『太平記』あるいは歌舞伎の『仮名手本忠臣蔵』や他の義士ものをも対象として、類似点の発見につとめる。つまりは、へ見立ての発想こそが本作を支えたと考えることができる。

こうした方法によって書かれた『忠臣水滸伝』の持つ長編構想の問題については、改めて検討しなければならない。

(1) 藤岡作太郎『近代小説史』(大正6・1、大倉書店) 第四編、第二章「京伝の読本」

(2) 内田保廣「京伝と馬琴」(『岩波講座 日本文学史』第10巻) 19世紀の文学、平8・4、岩波書店、所収

(3) 引用は横山邦治編『為永春水補外題鑑』(和泉書院影印叢刊49、昭60・11、和泉書院) による。

(4) 引用は(3) 掲出書による。

(5) 引用は木村三四吾編『近世物之本江戸作者部類』(昭63・5、八木書店) により、私に濁点・句読点を施した。

(6) 横山邦治編『読本の世界―江戸と上方―』(昭和60・7、世界思想社) 第一章「江戸読本の展開」第一節「寛政・享和年間」(大高洋司執筆) 参照。

(7) 引用は東北大学附属図書館狩野文庫蔵本による。

(8) 引用は国立国会図書館蔵本による。

(9) 麻生磯次「江戸文学と中国文学」(昭和21・5、三省堂) 前篇、第二章「読本の発生と支那文学の影響」参照。

(10) 村山芳郎「京傳雜俎―その水滸傳癖について―」(『東京支那學報』第15号、昭44・6)、小林祥浩「『忠臣水滸伝』の文體」(『東方學』第61輯、昭56・1)、徐恵芳「『忠臣水滸伝』の文體について―『通俗忠義水滸伝』の影響を中心に―」(『文学研究』第53号、昭60・3) など参照。

(11) 引用は東北大学附属図書館狩野文庫蔵本による。

- (12) 水野稔「馬琴文学の形成」(『江戸小説論叢』昭49・11、中央公論社、所収)。野口武彦「江戸期小説の言語構造」(『江戸文林切絵図』昭54・6、冬樹社、所収)にも「黄表紙風の見立て」との評語がある。
- (13) (12) 掲出の水野稔「馬琴文学の形成」
- (14) 重友毅「読本の発生と展開」(『近世文学論集』昭和47・5、文理書院、所収)
- (15) 清水正男「忠臣水滸伝について」(『近世文芸』第13号、昭42・4)
- (16) 『忠臣水滸伝』本文の引用は国立国会図書館蔵本による。以下、同。
- (17) 徳田武「解題」(『山東京伝全集』第15巻、平成6・1、ぺりかん社)
- (18) 大高洋司「解題」(読本善本叢刊『忠臣水滸伝』平10・10、和泉書院) 参照。
- (19) 『仮名手本忠臣蔵』本文の引用は東北大学附属図書館狩野文庫蔵本(嘉永三年(一八五〇)再版の七行本)により、節章などは省略した。以下、同。
- (20) 『水滸伝』本文の引用は『通俗忠義水滸伝』(中村幸彦編『近世白話小説翻訳集』第六巻、第十一巻、昭和62・4、62・11、汲古書店)による。以下、同。
- (21) 引用は宮城県図書館青柳文庫蔵本による。
- (22) 増田七郎『忠臣蔵』(昭15・12)、郡司正勝「忠臣蔵の趣向と水滸伝」(『幕間』第12巻第10号、昭32・10)など参照。増田によれば、井原敏郎が最初に言い出したもののようであるが、井原論文は未見。
- (23) 後藤丹治『戦記物語の研究』(昭11・1、筑波書店) 参照。
- (24) 引用は『名作歌舞伎全集』第25巻「丸本時代物集 一」(昭43・9、東京創元社) 所収の本文による。
- (25) 引用は、『日本戯曲全集』歌舞伎篇第15巻「赤穂義士劇集」(昭和3・11、春陽堂) 所収の本文による。大部分は文久三年(一八六三)十一月、江戸市村座所演の台帳に基づき、二段目・十段目・十一段目のみ万延元年(一八六〇)五月、江戸中村座所演の台帳によって補ったテキストである。
- (26) 野口隆「忠臣水滸伝の演劇的趣向」(『国語国文』第64巻第9号、平7・9) 参照。
- (27) 歌舞伎における『仮名手本忠臣蔵』の演出については、戸板康二『忠臣蔵』(創元選書、昭32・12、東京創元社)、服部幸雄編『仮名手本忠臣蔵』(歌舞伎オンステージ8、平6・3、白水社)などを参照した。
- (28) 八文字舎自笑『古今いろは評林』(天明五年(一七八五)刊)。引用は東北大学附属図書館狩野文庫蔵本による。
- (29) (6) に同じ。
- (30) (26) に同じ。

- (31) 小池藤五郎『山東京伝の研究』(昭10・12、岩波書店) 第四篇
「山東京伝の読本」、第二章「敵討ち物」
- (32) 鈴木敏也「京伝、馬琴が読本の処女作への一考察」(『近代国
文学素描』昭和9・10、目黒書店、所収) 参照。
- (33) (26) に同じ。
- (34) 拙稿「『教訓いろは醉故伝』論——『江戸の水滸伝』のうち——」
(『国際文化研究科論集』第5号、平9・12) 参照。